

YBA & BEYOND

British Art in the 90s from the Tate Collection

テート美術館 YBA & BEYOND
世界を変えた90s英国アート

京都市京セラ美術館

Kyoto City KYOCERA Museum of Art

京都会場:京都市京セラ美術館 新館 東山キューブ

本展は、90年代の英国美術の独自性を6つのテーマを通じて検証し、
各章をつなぐ重要な作品を「スポットライト」として紹介します。

序章	フランシス・ベーコンからブリットポップへ
第1章	ブローケン・イングリッシュ:ニュー・ジェネレーションの登場
第2章	おおぐま座:都市のイメージをつなぐ
第3章	あの瞬間 ^{とき} を共有する:音楽、サブカルチャー、ファッション
スポットライト	トレイシー・エミン《なぜ私はダンサーにならなかったのか》
第4章	現代医学
スポットライト	コーネリア・パーカー《コールド・ダーク・マター:爆発の分解イメージ》
第5章	家という個人的空間
第6章	なんでもないものから何かが生まれる:身近にあるもの
スポットライト	マーク・ウォリンジャー《王国への入り口》

序章 フランシス・ベーコンからブリットポップへ

フランシス・ベーコンは、1944年に《ある磔刑の基部にいる人物像のための三部作》(テート美術館蔵)を描き、発表当時戦争の恐怖を映すものとして衝撃をもって受け止められました。その44年後に描いた《1944年のトリプティック(三幅対)の第2ヴァージョン》でベーコンは同じ主題に向き合い、背景の色をオレンジから血液を思わせる濃厚な赤に変更しました。東西冷戦が終焉を迎える時代に描かれた本作品は、社会の変化と混迷を象徴的に示しています。

★「ブリットポップ」とは、1990年代半ばの英国で興隆したギター・ロック/ポップ音楽ムーブメントで、90年代の英国における若者文化や社会意識を象徴する言葉です。



フランシス・ベーコン 《1944年のトリプティック(三幅対)の第2ヴァージョン》1988年
Photo Tate © Estate of Francis Bacon All rights reserved. DACS & JASPAR 2025 G3928

第1章 ブロークン・イングリッシュ:ニュー・ジェネレーションの登場

1980年代後半、英国社会には揺らぎの感情が広がっていました。1979年より続いていたサッチャー政権が推進した自由市場経済と個人主義に基づく英国社会の再建の中で、格差が拡大し、失業率が高まりました。こうした状況の中、アートシーンに登場した作家たちは、マスメディアや大衆文化に想を得ながら「英国らしさ」を鋭く批評する視点を表明したのです。



ダミアン・ハースト
《後天的な回避不能》1991年
Photographed by Prudence Cuming Associates
© Damien Hirst and Science Ltd. All rights reserved. DACS/Artimage 2025



ルベイナ・ヒミド
《二人の間で私の心はバランスをとる》1991年
Photo Tate © Lubaina Himid. Courtesy Hollybush Gardens and Greene Nafai

第2章

おおぐま座:都市のイメージをつなぐ

1990年代初頭には未完成の建築物が目立ち、また、ジェントリフィケーション(都市の富裕化現象)により行き場を失う人が増加しました。それは若いアーティストたちにとって身近な光景であり、創作の着想源となっていたのです。



サイモン・パターソン
《おおぐま座》1992年

Photo: Tate © Simon Patterson and Transport for London



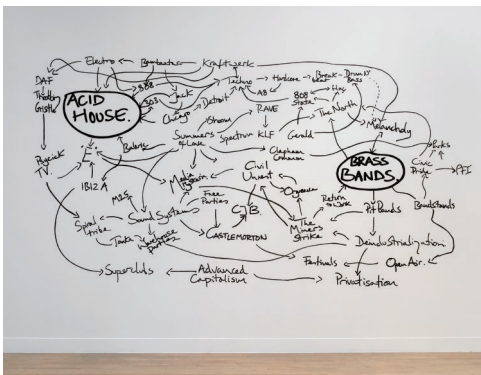
レイチェル・ホワイトリード

《A:クラブトン・パーク・エステート、マンデヴィル通り、ロンドン E5;
アンバーゲート・コート;ノーバリー・コート、1993年10月》1996年

Photo: Tate © Rachel Whitehead

とき 第3章 あの瞬間を共有する:音楽、サブカルチャー、ファッション

格差が広がり、不安感が漂う時代において、雑誌や広告のヴィジュアル面での雑多性と訴求力、音楽の解放感、アイデンティティを表現する服飾文化の多様性は、かけがえのない一瞬を捉えようとする若いアーティストたちの意思や社会的なつながりに対する関心と交差し、その関係は1990年代における英国美術の国際的発信力の源となりました。



ジェレミー・デラー
《世界の歴史》1997-2004年

Photo: Tate © Jeremy Deller



マーク・レッキー

《フィオルッチは私をハードコアにした》1999年

© Mark Lecky. Courtesy the artist and Cabinet London

スポットライト なぜ私はダンサーにならなかったのか

本作品は、作家の告白と共に語られるビデオ作品です。映像の前半ではエミンが育った海辺のリゾート地マーゲイトの風景が映し出され、彼女は1970年代後半にティーンエイジャーだった頃の苦しみを語っています。そして、作品の後半ではエミンはディスコ・ソングに合わせて楽しそうに踊り出します。それは、過去の苦い経験への勝利を示しているのです。



トレイシー・エミン
《なぜ私はダンサーにならなかったのか》1995年
© Tracey Emin

第4章

現代医学



デレク・ジャーマン
《運動失調—エイズは楽しい》1993年
Photo: Tate © The estate of Derek Jarman. Courtesy of The Keith Collins Will Trust

1990年代の作家たちにとって、医学の発展とヘルスケアは大きな関心事の一つでした。薬への信頼と副作用、身体へのコントロールが行われる医療現場もアーティストたちの主題となっていきました。そして、HIVの感染拡大とエイズによる死者の増加は、一つの病の流行の枠組みを超え、人々の間に恐怖、怒り、抵抗の感情を生み出し、多くの作家たちがこの病との関係から作品を制作しました。

スポットライト コールド・ダーク・マター:爆発の分解イメージ

本作品は、食器や楽器、レンガといった日常的に目にするものを大量に集め、時に変形させ、天井から吊るす彫刻作品で知られるコーネリア・パーカーの初期の代表作です。作品制作にあたり、作家は英国陸軍に物置小屋を爆破することを依頼しました。その残骸を一つ一つ拾い上げ、照明を落とした密閉された空間の天井から紐で吊るし、中央に強い光を放つ電球を設置しました。このプロセスによって、小屋の断片は空間に浮遊しているように見え、爆発の瞬間を切り取ったかのようなイメージが作り出されるのです。



コーネリア・パーカー
《コールド・ダーク・マター:爆発の分解イメージ》1991年
Photo: © Tate © Cornelia Parker Courtesy Frith Street Gallery

第5章

家という個人的空間



サラ・ルーカス
《煙草のおっぱい(理想化された喫煙者の椅子II)》1999年
© Sarah Lucas. Courtesy Sadie Coles HQ London

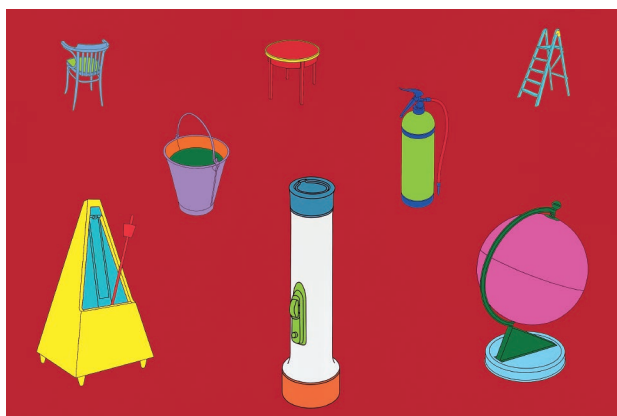
私的な空間を政治的な場と捉えた作家たちにとって、家族関係や個人のアイデンティティも考察すべき重要な問題であり、家庭の風景に潜む暴力や人間関係のひずみ、そして家父長制が個人を抑圧するジェンダーバイアスに正面から向き合う作品は、現代の私たちにも強い共感と深い内省を促すものとして存在しています。



グレイソン・ペリー
《私の神々》1994年
© Grayson Perry Courtesy the artist and Victoria Miro

第6章 なんでもないものから何かが生まれる：身近にあるもの

1990年代の多くのアーティストは物質文化に強い関心を持ち、日常生活で目にする脆弱で儚いものを作品の素材として積極的に取り入れました。こうした取り組みは、1980年代までのコンセプチュアル・アートがミニマルでスケールの大きなものに注目したことに対する反動でもあったのです。



マイケル・クレイグ＝マーティン
《知ること》1996年

© Michael Craig-Martin. Courtesy the artist and Gagolian

スポットライト

王国への入り口

ロンドン・シティ空港の到着ゲートをスローモーションで捉えた本作品では、イタリア・ルネサンス期の作曲家グレゴリオ・アレグリが旧約聖書詩篇第51篇をもとに作曲した合唱曲「ミゼレーレ」が背景の音楽として選ばれています。作家は、空港を国境に接する地帯、かつ現実世界の王国(英国)への入り口として捉え、その場所の持つ政治的、または象徴的な意味を浮き彫りにします。



マーク・ウォリンジャー
《王国への入り口》2000年

© Mark Wallinger. Courtesy of the artist.